

日本年金機構理事長賞 福島県 大戸 和子 様 （50代 女性）

「お父さんありがとう」、今心からそう思っています。

私が、20歳の誕生日になった時、忘れもしない雪の降る寒い日でした。

父は、材木の仕事をしており冷えた体で帰ってくるなり、「年金に入ったからな」と私に嬉しそうに、にこにこしながら年金手帳を渡してくれました。その時、私は何のことかわからず、とりあえず「ありがとう」と父に言ったことを覚えています。当時、我が家は妹と二人姉妹で二人とも夢を持っており、夢実現のため大学に通っていました。二人分の大学の学費を出すのは大変な状況だったと思います。それに大学は、自宅から遠く、アパート住まいでアパート代と食費代も二人分となると、かなり大変だったと思います。そんな中でまだ義務化されない時代に父は年金の必要性を考え、20歳になり私たちを国民年金に加入させてくれました。

後で、叔母から聞いたことに自分たちの生活費を削っても、私と妹に仕送りをして夢実現に向けて支援してくれていたとのことでした。かなり厳しい生活の中でも、父は何時も年金を納めるお金を忘れることなく、生活費とは別に毎月送ってくれました。私は、そのお金と振込用紙をもって役場の年金課に毎月お金を納めに行ったのを覚えています。時には、行くことに面倒くさいなと思うこともありました。大学の同期生に聞いても「何のこと」と言われ、知っている人はいなかったのではないかと思います。そんな中、役場にお金を払い込みに行くたびに、年金係の方が「あなたのお父さんとお母さんは素晴らしいね」と言ってくれたのを覚えています。父は、何時も先を見据えて行動する人でした。「将来自分の生活のためにも、そしてみんなのためにも大事になる」とよく言っていました。あの時代、まだ20歳で年金に入ることを義務化されていないときに、父は先を読んでいたのだと、今になって思えば素晴らしいと思うと同時に感謝しております。

私の年金のお知らせ通知にも、20歳から働くまでの間、国民年金に加入しており、その払い込み年数が書いてあります。見るたびに、いつもありがたく思っております。

その父も今は、病気で施設での生活を余儀なくされております。そんな父を支えてくれているのは、家族であり、そして年金の支援のおかげです。

少子高齢化時代、みんなで支えあう日本の年金システムを、私たち一人ひとりが自覚して暮らしを支えていけたらよいなと考えております。65 歳にならなくても私の知人は、病気のため障害年金をいただいております、一人暮らしでも生活をつなぐため支えてもらっています。誰のためでもない、一番は自分のため、そしてその自分が生活する地域の人々の生活を支えるため、生活と生活をつなぐため、年金は私たちにとって支えあう重要なシステムです。退職も近くなり、年金を支払う側から年金をいただく側にあと何年かで変わります。年金と自分を、考えることが多くなりました。老いることは不安もありますが、人が人を支えることは素晴らしいこと。「感謝の気持ち」を忘れることなく、年金をいただきながら幸せに生きていきたいと考えております。「ありがとうお父さん」